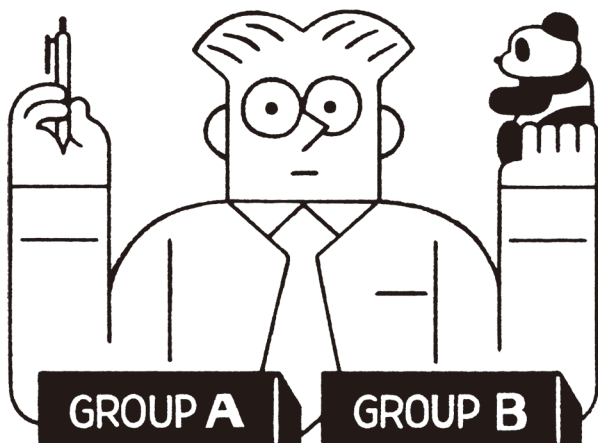


机の上の小さな変革



物の切り口

今回は「分類」をテーマに皆さんと一緒に色々考えていければと思っています。早速ですが、これから示す20個の物について、「回転運動をするもの・しないもの」という切り口で、2つのグループに分けてほしいと思います。それでは、お願いします。

ボールペン、パンダ、爪切り、ソファ、消防車、ゴミ箱、プール、ネジ、コピー機、カーテン、バナナ、踏切、紙コップ、チューインガム、ティッシュペーパー、雑誌、自転車、アジサイ、ふせん、マイク

□ ■ □ ■ □

いかがですか？ 捉え方によっては、ボールペン（ペン先にボールがあります）やパンダ（腕や体を回転させています）なども回転するものに入れていくことができそうですね。

それでは今度は、みなさんが自由に切り口を決めて上記の物について分けてもらいたいと思います。いきなり自由に決めるとなると難しいと思うので、まずは素材や構造に関連した切り口を1つ考えて、分けてみてもらえますでしょうか。それでは、お願いします。

□ ■ □ ■ □

さて、どうでしょう。みなさんどんなテーマで分類したでしょうか。素材や構造となると、たとえば「紙製

かどうか」や「中に水を溜め込んでいるかどうか」など色々考えられると思います。

さあ続いて、今度はみなさんそれぞれの主観的な価値にフォーカスして分類をしてみてください。主観的な価値とは、たとえば「持っている・いない」であったり、「ほしい・ほしくない」といったものでも構いません。何か基準を決めて分類をはじめてみてください。

—— 視点が関係づける ——

今回みなさんには、物の集合に対して、いくつかの切り口で分類してもらいました。切り口とはつまり、視点です。並んでいる物を、いかに多様な、しかも少し違った視点で眺めるかを決めることが重要になってきます。ポイントは、同じものにも複数の切り口を与えることができるし、切り口を変えることで物事の捉え方が大きく変わる、ということです。

私たちは、日常的にある物事に特定の属性をつけて見えています。たとえばバナナに対して、普通は果物といったカテゴリーで分類していますが、そこにも「扱うときに1回剥がす動作をするもの」といった分類の仕方ができると、バナナと絆創膏を同種のものとして捉えることができます。

このように、分類の練習をすることで新しい視点を手に入れ、無関係なものを結びつけていくと、新しい発想や着眼ができるのです。▲

PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科専任講師。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。